

<論文>

翻訳等価論の潮流と構築論からの批評

The Trends of Translation Equivalence Theories and Their Critiques from Constructionism

河原 清志

(金城学院大学)

Abstract

This paper aims to trace back the trends of translation equivalence theories that have been proposed in the history of translation studies, and analyze them in accordance with the multi-layer system of linguistic texts; that is, langue level (lexical categories, grammatical categories and textuality), parole level (pragmatic practices) and figure level (form and style). Eleven equivalence theories and other related theories are analyzed with some critiques from the perspective of “equivalence construction theory,” under which lies the fundamental principle of social semiotics based on Peirce’s semiotics and linguistic anthropology.

1. はじめに

本稿は 1960 年代以来盛んになってきた多くの翻訳研究のなかで、「等価」がどのように捉えられてきたのかについて、翻訳等価論を概括的に紹介しつつ批評し、その変遷を辿るとともに、今後の翻訳等価論のあり方について議論することを趣旨とするものである。

一般的に、翻訳とは異なった二言語間の言語変換であると考えられており、1970 年代に入ってから、はじめは多面的・複層的・多義的な翻訳行為のうち「言語実践行為」の側面（翻訳行為の言語的側面）に焦点を当てた諸学説が展開された。具体的には「等価」概念自体を中心に議論が行われるとともに、「翻訳シフト」「翻訳ストラテジー」「テキストタイプ論」などの議論が展開した。そしてこれに社会行為性が加味された「目的(スコポス)理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」なども盛んに議論されている。このいわば翻訳学における「言語理論」は「等価論」(等価の定義は後述)に対する批判を含みつつ、これを基軸に論を展開してきたと言える。

これに対して、「社会行為」としての翻訳の側面を看過していると全面的に等価概念を否定し批判するのが、主に文化的・イデオロギー的転回を遂げたとされている翻訳学の諸学説群である。これらは翻訳行為の言語的側面から目を社会的・文化的・政治的コンテキストのほうへ向けた研究を展開するものである。Bassnett & Lefevere (1990)、Cronin (1996)、Snell-Hornby (2006)、Pym, Shlesinger & Jettmarová (2006) などがそれである。これらの研究の下位分野として、たとえば Munday (2008/2012) は「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの

翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の(不)可視性」「翻訳の権力ネットワーク」などを挙げているが、他にもさまざまある(河原, 2011)。これらは翻訳学における「文化理論」と位置づけられ、言語的な等価だけに議論の焦点を当てることを批判するいわば「等価誤謬論」であると位置づけられるであろう。

以上が翻訳研究における「言語理論」と「文化理論」の大きな潮流であるが、これに関連し、これまでの諸学説を時間的経緯に沿って略説したものとして次の2つがある。Newmark (2009)によると翻訳学は、(1) 言語学的段階、(2) コミュニケーション論的段階、(3) 機能主義的段階、(4) 倫理・美的段階、を経てきたとしている。他方、Snell-Hornby(2006)は、(1) 前言語学的段階、(2) 言語学的段階、(3) 1980年代の文化的転回、(4) 1990年代の学際的段階、(5) 1990年代の諸転回、(6) 2000年代の回帰? という流れを示している。本稿は、この2つの時系列的な分類を基に、諸学説の布置を<等価>概念を基軸にして再構成しつつ素描する。説明の便宜上、時間が前後したり項目別の分類を重視したりした布置にしているものもある。以下の1から6が翻訳学諸学説の大きな潮流であるが、本稿は下記「2. 言語学的分析の諸学説(言語等価論)」を中心に取り上げ、3から6は後述する等価構築論の観点からどのように布置されるかについて簡単に触れることとする。

1. 近代以前の二項対立図式とその展開(直訳 vs. 意訳/忠実さなどを鍵概念として論じていた時代)
2. 言語学的分析の諸学説(言語等価論)
3. 社会コミュニケーション行為性を加味した言語分析の諸学説(社会等価論)
4. 社会文化的コンテキスト中心の翻訳分析の諸学説(等価誤謬論)
5. 翻訳哲学・翻訳思想(等価超越論)
6. 学際的・複眼的な翻訳分析の諸学説(多元等価論)

2. パース記号論から見た翻訳行為と等価概念

まずは翻訳行為の本質を見極めるために、翻訳が言語操作・記号操作の一種であることを前提に、米国・プラグマティズムの科学哲学者・パース(Charles Sanders Peirce: 1839-1914)が提唱した記号論(semiotics)について見てゆく。パースは記号一般について、対象(object)と記号(sign)との間に大きく、類像性(iconicity)、指標性(indexicality)、象徴性(symbolicity)という記号作用を見出した。まず、①この類像性は、対象(Object; O)と記号(Sign; S)とが同一/同等/類似/相似的であることを示す記号作用であり(指標性はSがOの存在を示す作用、象徴性はSとOは恣意的な関係であることを示す作用)、この記号作用は解釈項(interpretant; 解釈者による解釈)を通して「対象≒記号」とであると解釈者が見なす、つまり両者の間に等価性を見出すという記号に対する人の認知作用であると位置づけられる。しかしながら、②この認知作用は同時に、その認知行為の一次的、偶発的で固有な意味作用でもあり、これは当該コンテキスト特有の意味を帯びる語用論的な解釈であって^{註1}、当該等価構築行為の一次的/二次的社会指標性をも有する(小山, 2008, 2009, 2011)。一次的社会

会指標性とは、話し手・聞き手などのコミュニケーション出来事参加者たち、言及指示対象、これらの間の社会的距離(親疎)、力関係(上下関係)、場(コンテクスト)のフォーマリティーなどを示す概念である。また二次的社会指標性とは、これらのレジスターの使用者たち(話者たち)のアイデンティティや力関係上の位置を強く示す(指標する)という特徴を有する(小山, 2011, p. 184)。さらに、③これらの類像作用、(一次的/二次的社会)指標作用の背後には、行為者のもつ信念体系や価値観といった象徴的な世界観が言語実践行為に意識的ないし無意識的に反映されている(象徴作用の反映)。このように①類像作用、②指標作用、③象徴作用という3つの作用が三位一体となって複合的に等価構築、意味構築を行いつつ、絶えず意味改変をしているのが人の言語実践行為の意味および意味づけのあり方であるといえる。

これを翻訳行為一般に適用するならば、対象 O に対して S という記号を当てる行為はまさしく記号間翻訳であり、その一形態として O が起点言語テキスト、S が目標言語テキストである場合が狭義の翻訳、すなわち言語間翻訳であると言える(cf. Jakobson, 1959/2004; 真島, 2005)。そして両者に通底するのは、①「O≡S」(対象と記号が等価な関係)であると見做す行為、すなわち等価構築行為という性質である(河原, 2011b)。しかしながら同時に、②この「O≡S」は特定のコンテクストで生起する翻訳行為であり、一回性・偶発性・固有性を有するもので、このようなO≡S等価構築行為自体のコンテクストを指標する記号作用をも同時に有する。さらに、③翻訳者の有する価値観・信念体系といった象徴的世界観が翻訳意識となって作用する側面もあり、これらの複合的な意味構築行為が翻訳行為であると言える。以上のことを踏まえて、翻訳の「等価」概念について検討する。

一般的に「等価」(equivalence)は、原文と翻訳とを「同一」ないし「類似」なものとして説明する概念で、これをめぐり多くの研究者が様々な視点を提示してきた最も意見の対立のある概念である(Palumbo, 2009, p. 42)。実際、同一の原文に対して翻訳者による解釈はばらつきがあり、さらにそれに基づいた訳文産出もばらつきがある。つまり、原文解釈および訳文産出において二重の不確定性を内包した翻訳不確定性が存在する。と同時に、翻訳以前に、言語構造の異なる二言語同士、全く同じ意味で訳すことは原理的に不可能であることも指摘できる(翻訳不可能性)。

しかしながら「等価」という概念は「原文の意味と訳文の意味が同じになるように訳すこと」というある種の努力目標を語る言葉でもある(河原, 2013)。現にチェスタマンは、「等価」という概念は翻訳を学び、実践し、研究する上で必要不可欠な概念であり、「等価は間違いなく翻訳理論の中心的概念である」としているし(Chesterman, 1989, p. 99)、バスネットも翻訳研究の中心的課題として「等価の諸問題」を扱っているくらいである(Bassnett, 2002, pp. 30-36)。つまり、等価概念を措定して初めて、翻訳シフトや翻訳の目的(skopos)、翻訳ストラテジー(strategy)、多元システム(polysystem)、翻訳規範(norm)など翻訳学の中心的概念の原理も論じられるのである。更には上記の文化理論群も、等価概念を批判しつつも、暗黙裡に等価を前提に、等価からの逸脱現象を社会文化的コンテクスト分析という手法によって解明するという研究方法論ないしイデオロギーを有していることも指摘できる。

考えてみると、これまでの翻訳学の言語理論も文化理論も、その拠って立つ意味観は本質主義的であると言える。意味の本質主義とは、意味は人の外部ないし内面にア・プリオリに本質的に存在し、翻訳はそれを起点言語から目標言語へ転移・伝達・転換するという考え方である(Palumbo, 2009, pp. 44-45)。これまでの翻訳学の諸学説は、等価(equivalence)が「等しい価値」、つまり人が「等しい意味ないし価値」だと意識的／無意識的に見做したものの言表への反映であると捉える構築主義的な方向へと発想の転換を行っていない。そこで、等価はある／ない、といった翻訳学の言語理論と文化理論の対立の構図は、特に文化理論のサイドによって人為的に作出されてきたのである。また、両者を補完的・融合的にとらえようとする主張もあるが(Tymoczko, 2002; Crisafulli, 2002; Chesterman, 2002 など)、この見解も言語による等価構築自体がそもそも社会的な営為、つまり社会的・文化的・歴史的・イデオロギー的な一回的・個別的な行為であることを直視していない。

この点、Pym(2010)は「等価」を「自然的等価」と「方向的等価」に下位区分した。「自然的等価」(翻訳行為以前に言語間・文化間に既に存在する起点テキスト＝目標テキスト間の同等の価値)という概念は、意味が静的・客観的に存在し、それを起点言語で生成したものが起点テキストであり、目標言語で生成したものが目標テキストであって、両者には同等の価値が翻訳行為以前に存在するものである。また「方向的等価」(ある方向で翻訳した際に作出される非対称的な等価)という概念は、翻訳者が複数の翻訳方略の中から1つを選択し、通常、直訳志向か意識志向かの二項対立図式から選択する、というものである。ところがこの議論も、意味の不確定性や解釈の無限更新性を見据えた等価に関する構築主義的な見方ができていないため、静的・本質主義的な意味観に基づいた翻訳プロセスに立脚した翻訳観で等価を分析しているのである。等価概念のもつ理論上の誤謬を議論の俎上に乗せる役割は果たしているし、以下で述べるナイダに見られるような形式的等価 vs. 動的等価といった従来型の二項対立性の本質をよく捉えてはいるが、さりとて、翻訳の目的や規範、あるいは翻訳の不確定性などについて意味論の本質(言語の意味構築性)と接合し一貫性のある記述を行っているとは必ずしもいえない。

そこで本稿は、改めて翻訳研究における「等価」概念について再考しつつ、これまでの等価に関する諸学説の潮流を押さえながら、それらを等価構築の観点から批評しつつ分類し整理する。本稿では「翻訳等価」をめぐって、「言語等価論」を中心に整理しつつ主要な翻訳等価論の潮流をまとめることとし、「等価前史」は別稿で扱い、「等価論の展開」(社会等価論、等価誤謬論、等価超越論、多元等価論)については本稿の最後で翻訳学全体における布置を簡単に述べることにする。

3. 言語等価論

本節では翻訳ないし翻訳テキストをめぐる等価論の諸学説について、等価の本質論に根差して批判的に検討を行う。まずは言語テキストの重層性について簡単に触れておきたい。

表 1: 言語テキストの重層性


局面	レベル		次元	位相
言語 構造	ラング	語彙範疇	意味論的次元	↑ マイクロ ↓ マクロ
		文法範疇	統語論的次元	
		テキスト構成	テキスト機能的次元	
行為	パロール	語用実践	語用論的次元	全体
詩学	フィギュール	文体様式	文体論的次元	

言語は形態素・語のレベル、それを線條構造に結び付ける統語・文法のレベル、さらにそれをまとめたテキストとして構成するテキスト構成のレベルと、マイクロ単位からマクロ単位へと分析の幅を広げて捉えることができる。そしてこの主に3つの範疇が F. ソシュールの言う「ラング」、つまり言語構造ないしコードとして定位できる言語テキストの側面である。次に、この言語構造を実際の言語使用の場でどのような意味を生起させて使用し実践するかという語用実践のレベル、すなわち F. ソシュールの言う「パロール」の側面がある。さらには、言語の諸機能のうち、言語それ自体に意識を向ける作用ないし機能にフォーカスを当てるのが詩的機能^{註2}であるが、この詩的機能、つまり文体を扱うのがフィギュール(文彩、文体様式)のレベルである^{註3}。(但し、論者によってはテキスト構成を語用論的的局面として扱う者もあり、本稿ではラングとパロールの曖昧な境界線上に定位しておく。その意味において、表2では破線で示している。)

では、この言語テキストの重層性を承けて、これまでの言語等価に関する諸理論が何を対象に論じているかを中心に、以下の表2でまとめる。

表 2: 翻訳等価の類型

レベル	ラング/コード			パロール/機能	
	語彙	文法	テキスト	語用・機能	文体
次元					
ナイダ (1964, 1969)	① 語の意味分析	② 言語間の統語的転移	③ 等価反応達成の手法 (形式的等価 vs. 動的等価)	_____	_____
ノイバート (1968, 92, 94)	(狭義の言語的等価・意味的等価への批判)		テキスト的等価、語用論的・コミュニケーション的等価	_____	_____
カーデ (1968)	語彙的(量的)等価類型	_____	コミュニケーション価値の潜在的等価	_____	_____
ポボヴィッチ (1976)	① 言語的等価	② 範列的等価	_____	③ 文体的等価 *用語注意	④ テキスト的等価 *用語注意
コラー (1979)	① 指示的等価 ② 暗示的等価	_____	③ テキスト規範的等価	④ 語用論的等価	⑤ 形式的等価
ウイドーソン (1979)	① 構造的等価	② 意味的等価	_____	③ 語用論的等価	_____

ボグラント (1980)	_____	_____	_____	経験的等価	_____
ニューマン (1980, 1994)	 状況変数に応じた機能的等価				
ニューマーク (1981, 1988)	①意味重視の翻訳		②コミュニケーション重視の翻訳		_____
ハリデイ (1992, 2001)	メタ機能論的等価				_____
	観念構成的機能		テキスト形成的機能	対人的機能	
ベイカー (1992/2011)	①語の等価 ②句の等価	③文法的等価	④テキスト的等 価	⑤語用論的等 価	_____

(1) E. ナイダ(1964年、1969年)

まずは、「翻訳の科学」を標榜した E. ナイダの主張を見てゆく。ナイダの主張は大きく3点ある。(1) (等価の前提としての) 意味分析の手法、(2) (等価を実現するための) 言語間の統語的転移の手法、(3) 等価反応達成の手法、である。

まず、(1) 意味分析に関し、『翻訳学序説』(Nida, 1964)では「意味への科学的アプローチ」を唱え、意味は言語的意味、指示的意味、感情的意味があることを指摘し、指示的意味と感情的意味を決定する手法として、位階構造化、成分分析、意味構造分析を唱えた。しかしこれらの意味分析は近時の特に認知意味論の展開により、その限界が明らかにされている(松本, 2003; 深田・仲本, 2008 など)。

次に、(2) 言語間の統語的転移の手法としてナイダは、N. チョムスキーの変形生成文法の影響を受けて、翻訳プロセスを「科学的」に説明しようとした『翻訳—理論と実際』(Nida & Taber, 1969)では、翻訳では起点テキストの表層構造を深層構造の基本要素に「分析」し(=逆行変形)、その要素が翻訳過程で「転移」され、意味と文体の面で「再構成」されて目標テキストの表層構造を生む(変形)、とする翻訳の三段階システムを提唱した。しかしこのようなモデルは現実の言語処理、翻訳プロセスのあり方から乖離しており、統語面だけでなく「意味」(特に語用論的意味)を扱う翻訳プロセスの説明として不適切である。

さらに、(3) 等価反応達成の手法として、ナイダは前述の1964年の本で、直訳・自由訳・忠実訳という用語を排し、「二つの基本的志向性」あるいは「等価のタイプ」を導入した。「形式的等価」と「動的等価」である。前者は、形式・内容両面において起点テキストのさまざまな要素に目標テキストが一致するようにする訳出、後者は原文読者と翻訳読者が同じ効果ないし等価反応を持つように受容できる訳出を目指す、というものである。

以上を本稿の「等価構築」の視点からこれを眺めると、まず(1) 意味分析の手法というナイダの語彙意味論は、成分分析や意義素の抽出が可能とする、当時の誤った科学主義のもとでの意味論学説に依拠していることがそもそもの誤謬につながっており、意味構築のダイナミズムが考慮されていない。(2) 言語間の統語的転移の手法という統語論は、チョムスキーが意

図的に言語のうち科学的に立証が可能な側面のみを焦点を当ててミスリードした点を等閑視し、翻訳のプロセス研究に応用してしまったことがそもそもの誤謬につながっている。さらに(3)等価反応達成の手法という認知的側面やコミュニケーション的側面は、タイトラーにその祖形があるもののナイダが初めて唱えた点、評価に値する。しかしながら、安易に等価効果とか等価反応と言ってしまった点、厳しい批判に晒されてしまった。「動的等価」は目標言語的ニーズや文化的期待に合わせ、完全に自然な表現を狙うというものであるが、そもそも上述の解釈の不確定性や構築性に照らすと、等価反応の達成は原理的に不可能である。これは言葉の意味についての深い考察が欠けているために根本的に犯してしまった誤謬である。ナイダが科学主義を標榜し、分析の客観性を主張したにも拘らず、依拠した科学的言語理論の非科学性が露呈する結果となった。

(2) A. ノイバート(1968年、1992年、1994年)

ライプツィヒ翻訳科学派であるノイバートは、翻訳を「起点言語テキストの話し手と目標言語テキストの話し手との間のポテンシャルな関係を結ぶこと」と規定する(Neubert, 1968, p. 64)。翻訳は話し手(Sprecher)どうしを結ぶのであって、言語(Sprache)どうしをではない、という人間本位・現場本位の考え方である(平子, 1999, p. 198)。コミュニケーションを第一義とする翻訳理論であると言えよう。

また、ノイバートはG. シュリーヴとの共著で、上記の考え方を発展させ、タイトル通り、テキスト全体から翻訳や等価概念について考察する議論を展開している。その主張は以下の通りである(Neubert & Shreve, 1992, pp. 142-148)。

- ・ほとんどの翻訳等価への批判は等価を狭義に解釈していることに起因する。起点言語の語と目標言語の語は意味が等しいなどということはほとんどありえない。したがって、狭義の言語的な等価は批判を免れない。
- ・しかし、テキスト的等価は可能である。これは語どうしの意味的等価ではない。テキスト間の語用論的等価という新たな系列のものである。このテキスト的等価はプロトタイプという概念に端を発している。テキストどうしが等価だと言えるのは、テキストのプロフィール(特徴)が状況的にも機能的にも等価なプロトタイプから出てきたものである場合、つまり等価な社会的、コミュニケーション的な役割を果たしている場合である。
- ・「等価」の概念は、目標言語のプロトタイプによる制約の範囲内での意味的一致ということになる。起点テキストのテキスト構成は意図的に再構成されて目標テキストのテキスト構成を生み出すのである。
- ・等価は文化や言語の境界を越えて、あるテキストが別のテキストをどのぐらいうまく代理するかを測るものである。したがって、コミュニケーション的等価とテキスト的等価は実践面でのコミュニケーションの成功度を実際に測る物差しとなる。コミュニケーション的等価はディスコース・レベルにおいて、テキスト的等価となる。
- ・コミュニケーション的等価はテキストに不確定な要素があることをほのめかしている。読者がテ

クストから抽出するテキスト的意味は翻訳者によって仲介されてきた。同一のテキストが何度も翻訳され、以前の翻訳テキストに取って代わる目標言語でのテキスト化が行われることもあろう。すると多くの目標言語のテキストが現れ、それぞれが起点テキストとテキスト的にもコミュニケーション的にも等価なものとなる。この複数の目標テキストどうしは厳密に言えばパラレル・テキストではない。しかしながら、共通したテキストの特徴を互いに持っている。テキスト構成について相互に明確化し合うことにもなるかもしれない。こういった兄弟テキストはひとつの翻訳作品群であるが、これは異なったコミュニケーション状況の下で生み出された解釈群なのである。

ノイバートはまた、1994年の論文(Neubert, 1994)で、翻訳の評価や実務においては、起点テキストと目標テキストの間に「何らかの等価関係」を想定せざるを得ないと述べている。これは特定の状況に限定される機能的概念であると言え、翻訳教育を念頭に置いた議論である。

ノイバートはコミュニケーションの科学という観点から、狭義の等価概念は排除しつつも、テキスト的・語用論的・コミュニケーション的等価を唱える。「テキストのプロフィール(特徴)が状況的にも機能的にも等価なプロトタイプから出てきたものである場合、つまり、等価な社会的、コミュニケーション的な役割を果たしている」という点を重視するのである。そして、「『等価』の概念は、目標言語のプロトタイプによる制約の範囲内での意味的一致」と定義し、同一の原文に対する複数の翻訳テキスト(兄弟テキスト)はひとつの翻訳作品群であり、異なったコミュニケーション状況の下で生み出された解釈群であるとして相対的に捉えている点、等価構築仮説を論証するものでもある。

(3) O. カーデ(1968年)

O. カーデはA. ノイバートやG. イェーガーらとともにライプツィヒ翻訳科学派と呼ばれている。彼らはマルクス主義的合理主義による、伝達科学的な由来をもつ翻訳理論を立てた。パローラ(コミュニケーション)第一主義の翻訳論である(平子, 1999, p. 198)。カーデは、1968年の論文で、以下のように主張した(Kade, 1968)。

カーデは「二言語コミュニケーションによるプロセス」を広義の翻訳、その中の核心部分である「コード変換」(起点言語から目標言語への変換)を狭義の翻訳とよぶ[Kade 1968: 199]。[中略]翻訳とは「起点言語の合理的な情報内容を保持しつつ、伝達効果を損じないで目標言語で置き換えること」である。この情報内容を客観的にとらえるためにカーデは不変量(Invariante)[同書 207]という物理学の用語を用い、コード変換において「コミュニケーション価値の潜在的等価」を不変に保つことをめざし、「翻訳単位」というものを考える。「翻訳単位とは、起点言語テキストのうちの、目標言語テキストの部分に置き換えられうる最少部分であり、これが内容次元での不変の条件をみたすのである」とカーデはいう。(平子, 1999, p. 198)

またカーデは、同論文で、特に専門用語などの語彙的等価について次のように分類している(Kenny, 2009)。

- (1) 1対1等価:1つのSL表現に対し、1つのTL表現が対応する場合
- (2) 1対複数等価:1つのSL表現に対し複数のTL表現が対応する場合
- (3) 1対部分等価:1つのSL表現が意味する概念に対し、TL表現が一部しかカバーしない場合
- (4) 1対ゼロ等価:SL表現に対応するTLがない場合

これは量的な関係で等価を分類し、コード変換(狭義の翻訳)に客観的な単位を活用することで、客観性のある科学的な翻訳理論を目指していると言える。ところが、翻訳研究を言語の体系や構造の研究と同一視していること、議論が単語レベルに限定されていることを理由に批判を受けている(Snell-Hornby, 1988, p. 20)。旧来の古い意味論に立脚した素朴な議論であり、等価構築の実相からすると批判を免れないが、後述するベーカーも実際の翻訳分析において類似した議論をしていることは押さえておきたい点である。

(4) A. ポポヴィッチ(1976年)

ポポヴィッチは翻訳等価の概念を次の4つに分類する(Popivič, 1976 in Bassnett, 2002, p. 32)。

- (1) 言語的等価:起点テキストと目標テキストの両方に言語レベルで等質性がある場合。
例として、逐語訳。
- (2) 範列的等価:表現の選択軸(範列)の要素に等価性がある場合。例として、文法要素。これをポポヴィッチは語彙的等価よりも上位のカテゴリーだと捉える。
- (3) 文体的(翻訳的)等価:起点テキストと目標テキストの両方に、不変の核となる意味と言表とが同一になることを狙った要素の機能的等価がある場合。
- (4) テキスト的等価:テキストの連辞軸での構成に等価がある場合。例として、形式や形の等価。

ポポヴィッチによる等価の分類は、ソシュールの範列と連辞の考え方と、文体の重視という特徴がある。特に韻文の翻訳においてテキスト的等価を提唱して、形式や形の等価をどのように具現化するかという議論を行っているのが特徴的である。しかしながら、(1) 原理的に起点言語のある単語と目標言語のある単語との意味に完全な一致はありえないところ、逐語訳に「等質性」があると無批判に位置づけている点、(3) 二言語間で意味と言表が一致する言語要素を無批判に措定し、機能的等価を論じている点など、理論的には改善の余地のある等価論であると言える。具体的な翻訳テキスト分析がなされていないためわかりにくさもあるが、ポポヴィ

ツチの学説は 1960 年代、70 年代にチェコスロバキアで翻訳等価や翻訳シフトについて理論上大きな展開があったことを示している。

(5) W. コラー (1979 年)

翻訳の科学性の追求はドイツで主に展開した。W. ヴィルス、前述の O. カーデ、A. ノイバートなどのライプツィヒ学派である。等価に関しては、W. コラーが 1979 年の著書 (Koller, 1979) で、「対応」という概念との対によって、翻訳の科学と対照言語学との違いを鮮明化した。対照言語学は 2 言語のシステムや構造を比較しその異同を描くのに対し、翻訳の科学は特定の起点テキストと目標テキストの組み合わせ、および文脈から等価基準を判断する、というものである。等価の実体についてコラーは示してはいないものの、5 つの異なった等価タイプの記述を試みた。①指示的等価 (語彙の指示的意味に関わる。ST と TT の語が現実世界の同一物を指す)、②暗示的等価 (同義の言葉の選択に関わる。語が同一ないし類似の連想を引き起こす)、③テキスト規範的等価 (テキストタイプに関わる。語が類似の文脈で用いられる)、④語用論的等価 (同等な効果に関わる。ナイダの動的等価と同じ)、⑤形式的等価 (テキストの形と部的価値、文体的特徴に関わる。表現的等価とも言い、綴りや音韻面で類似した特徴を持つ)、の 5 つである。コラーはまず翻訳のテキスト分析を行い、つぎにコミュニケーション状況を分析して等価要件の階層を定めることを想定している。そして、テキスト分析のチェック項目として、言語の機能、内容の特徴、言語と文体の特徴、形式的・美的特徴、語用論的特徴、の 5 つを挙げている。

コラーについて概括すると、科学主義を深めるため、翻訳の科学と対照言語学、翻訳能力と外国語能力などの従来とは異なった二項対立図式を描いたことは注目に値する。また、等価についても従来の二項対立に便乗しその延長線での議論を展開するのではなく、5 つの異なった等価タイプの記述を試みたことも評価に値する。コラーの段階に至って、言語学の知見が翻訳研究にかなり導入され、理論的な枠組みも整備されてきたと言えるだろう。しかしながら、コラーの理論はまだ予備的段階のものであり、依拠している言語理論も 1970 年代までのものであって、精緻さに欠ける。また、そもそも「等価」とか「意味」の原理論、本質論を展開することなく、翻訳研究に適用できそうな言語理論のごく一部を導入しているのみであり、素描した全体像は画期的ではあるが、これを受けて更なる理論的整備が必要だと言える。科学主義を称揚するドイツの学派が、専ら言語学に依拠しているという点、翻訳の言語的側面に分析対照を矮小化させている点が、当時の翻訳研究のイデオロギーとして析出されるだろう。

(6) H. ウイドソン (1979 年)

ウィドソンは 1979 年の論文で、言語教育に翻訳をどう組み込むかという観点から、翻訳について論じている。まず、構造的等価 (形式的な類似性の対応関係)、意味論的等価 (観念構成的および対人的要素を表す共通した深層構造)、語用論的等価 (発話のコミュニケーション機能の等価) について定義した上で、以下のように述べている (Widdowson, 1979, p. 65)。

(言語教育の技術として)翻訳を使うことへの反対論がおそらく一般的に依拠している想定は、翻訳は必然的に構造的等価を打ち立てることになるというものである。例えば、翻訳によって学習者は起点言語の文と目標言語の文の間に直接的な意味の1対1対応があると想定してしまうのである。それに関連して、翻訳によって学習者は目標言語の文の形式的な特徴に目を奪われてしまい、コンテキスト上の意味を求めること、つまり、文と適切な状況との関係の機能である意味に注意が向かなくなってしまうという批判もある。

しかし、翻訳が意味的等価を構築する練習として文法的な深層構造に準拠して行われるならば、1番目の批判は失当である。また翻訳が語用論的等価を構築する練習としてレトリック的な深層構造に準拠して行われるならば、2番目の批判も失当である。

(Widdowson, 1979, p. 67)

これはあくまでも言語教育に翻訳を導入する教育的視点からの論稿ではあるが、翻訳研究プロパーの学者が等価を問題にし始めたのと同時期に、構造的等価、意味論的等価、語用論的等価という概念を提唱した意義は大きいと言える。ウイドーソンが「翻訳が意味的等価を構築する練習」「翻訳が語用論的等価を構築する練習」という表現によって、等価の構築性を謳ったことも注目に値するし、「練習」という表現によって等価構築の一回性、偶然性、可変性、暫定性、改良可能性、などの示唆を含ませている。

(7) R. ド・ボウグランド(1980年)

テキスト言語学の研究者であるド・ボウグランドは1980年の著書で、テキスト言語学の一つの応用例として翻訳について論及した(de Beaugrande, 1980)。「仮想のシステムを扱う『主流』の言語学は貢献するところがあまりなかった。翻訳は常に現実の問題だからである」と述べ、テキスト言語学はそれとは異なり翻訳研究に実質的な貢献ができるとしている。ポイントは、「翻訳が可能なのは唯一、人間が経験世界を共有し、おそらく少なくともいくつかの普遍的な処理方略を備えているという理由からだ」という点である。このことが、ド・ボウグランドが唱える「経験的等価」の土台となる考え方である。

[前略]テキストとその翻訳との間の等価は、形にあるのでも語彙の意味にあるのでもない。テキストの受容者の経験のみにありうるのだ。[中略]「意識」vs.「直訳」をめぐる議論ではなく、「受容者ベース」vs.「翻訳者ベース」というのが真の対立であろう。そして前者のみがコミュニカティブな等価を主張できるのである。(de Beaugrande, 1980)

この経験における等価は、本来は間テキスト性や詩的言語の多価性を指す。が、これは翻訳の受容者の認知的経験の等価、つまり認知効果における等価と読み替えることができ、その点でナイダの動的等価と同じである。つまりは、ナイダの動的等価論の批判がそのままこれにも当てはまることになる(なお、Snell-Hornby, 1988, p. 21の批判も参照)。

しかしながら、テキスト言語学からの見地から翻訳論に迫るものとして、これ以降の翻訳研究

者に与える影響も強い。処理方略とか経験的等価といった概念は、等価構築の視点からすると真つ当な議論である。つまり、「等価」概念を「原文の意味と訳文の意味が同じになるように訳すこと」というある種の努力目標だと考えた場合(河原, 2013)、翻訳者にとっては様々な処理方略を駆使して等価を目指すのであり、受容者、つまり読者にとっては翻訳されたものは原文と同じ意味であることを想定して受容し、等価の経験を経るのであることからすると、ある種の指針となる概念になる。「経験的等価」を「経験的等価構築」と読み替えると、これは新たな価値のある説となり得るだろう。ナイダのように単に「後者は原文読者と翻訳読者が同じ効果ないし等価反応を持つように受容できる訳出を目指す」というのではなく、様々な処理方略の中から選択的に等価を目指す、という等価構築性を前面に押し出す点において、そして経験的等価の相対性を認める点において、当該新規概念(経験的等価)は有益だと思われる。

(8) A. ニューマン(1980年、1994年)

ニューマンは1980年の著書(Newman, 1980)、そしてその主意に沿って書いた1994年の論文(Newman, 1994)で、翻訳のあらゆる変数がどのような状況でも重要であるとは言えないため、翻訳者が個々のケースで優先順位を決めるべきであることを強調し、機能的等価(functional equivalence)を提唱した。重要な箇所を以下で抜粋する(Newman, 1994, pp. 4695-96)。

- すべての変数に対して等価またはおよその対応を求めるのは困難で不可能なことでさえある。文化的格差が大きい場合、翻訳研究者のなかには翻訳は不可能だと主張するものも出てくる。この主張に対する答えは2つ。ひとつは、翻訳等価は絶対必須の特性ではなく、およその対応関係であって、翻訳者が言語の差を補償するための資源を操作することが関わるものである。
- ふたつめは、すべての変数があらゆる状況で重要性があるわけではない。例えば、視空間的な等価は新聞の見出しであれば重要だし、音声上のマッチングは映画の吹き替え、詩の頭韻、あるいはソングライターが楽譜に合わせて翻訳する場合には重要である。翻訳者の表現の選択はこのような総ての特徴の相互作用によって決まる。
- 等価はそれぞれの場合で優先順位をつけることが問題となる。時として目標言語の自然な統語順を犠牲にしても特定の詩的効果を再現し、機能性を持たせるようにすることもある。
- 機能的等価を決するには、翻訳者はトップダウンのやり方を採らねばならない。まず起点テキスト、目標テキストの両方の角度から見たディスコース全体の一般的な性質を考え、それから下位の言語単位のレベルでのマッチングを行っていく。等価が最も完全に忠実に実現されているのは、最も下位のレベルでマッチングが実現している場合であると考えられるであろう。

ニューマンの主張は、多くの状況変数とそれらの相互作用によって、機能性を重視して翻訳結果が決せられること、その決定は翻訳者が意識的または直観的に行うこと、機能的等価はト

トップダウンのやり方で行われることなどというものである。この点、機能的等価を扱ったものに、ニューマンより古くは House (1977)、ニューマンより新しいものは de Waard & Nida (1986) がある。House (1977) は翻訳評価を体系化するためにこの概念を導入した。彼女はテキスト機能の多次元分析を提唱し、3つの言語使用者と5つの言語使用を指定し、起点テキスト、目標テキストの「テキストプロファイル」を作成して、状況の次元で両者がマッチングすることを以って等価とした (House, 1977, pp. 42-49)。しかし、これは潜在化翻訳のみに当てはまること、社会文化的規範の差異を考慮せねばならないこと (House, 1977, pp. 204-205) など、困難な点もある (これには批判が集まり、あとで改訂版を出した。House, 1997)。また Waard & Nida (1986) は従来ナイダが主張していた動的等価に代わるものとして、より誤解が少ない「機能的等価」を提唱した。これは翻訳のコミュニケーション機能に焦点を当てるものである。

これらを等価構築の観点から考察すると、意味の構築にあたり人はインプットする入力情報に価値の優劣をつけ、取捨選択を行う。その際、トップダウンで判断がなされる。最も下位のレベルでマッチングが実現することは原理的には不可能であり、翻訳においてある要素を前景化し、他の要素を後退させて機能の点で等価を実現する、ということを全面に出した学説である。等価は本質的にある／ない、という議論ではなく、何を重視して等価を構築するか、という議論へとシフトさせる点で、機能的等価という概念は有益である。

(9) P. ニューマーク(1981年、1988年)

ニューマークは翻訳者訓練を念頭においた学説を提案した (Newmark, 1981, 1988)。彼は忠実性や起点言語重視 vs. 目標言語重視といった旧来の用語法を「意味重視の翻訳」「コミュニケーション重視の翻訳」として論を展開した。「意味重視の翻訳」はできる限り原文の正確な文脈的意味に近い形で目標言語の意味的・統語的構造に合わせて訳し、「コミュニケーション重視の翻訳」は原文読者とできるだけ近い効果を翻訳読者に与えるように訳す、としている。しかし、原文と翻訳は時空を超えていることから、等価効果は錯覚だとし、また翻訳読者にすべて説明を施す訳文を提供することを疑問視しているなど、全面的な等価効果は否定している。彼の論調は、時間と作業条件の制約がある翻訳環境に鑑み、翻訳者が認知プロセスの効率化を図ることを重視し、基本的に起点テキストの語彙と文法に密着させる「直訳」による労力の軽減を推奨している。そのうえで、意味重視にするかコミュニケーション重視にするか、という選択を勧めている。そしてこの2つが対立する場合(意味重視だと異常な訳出になるなど)には、コミュニケーション重視の翻訳が優先されるとする。

ニューマークの主張は、パラメーターを立て、意味重視の翻訳とコミュニケーション重視の翻訳とをマトリックス化して比較対照するなど、翻訳者教育を目的にした理論の提唱には実践面での意義がある。しかし、そうであるがゆえに、強い規範的・模範的性格 (prescriptive、規定的とも訳される) を帯びてしまっていることも確かである。

(10) M. ハリデー(1992年、2001年)

選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics; SFL) の提唱者であるハリデーは

1992年の論文(Halliday, 1992)のなかで、言語学の立場から翻訳理論に貢献できることについて記している。まず翻訳理論とはどのように訳すべきかではなく、翻訳をする際に何が起きているかに関するものである、したがって、説明的かつ記述的であるとする。そして、翻訳とは意味を作り上げる活動(meaning making activity)であり、導かれた意味の創造(guided creation of meaning)であるとする(これは起点テキストに導かれた、という意味である)。そして、翻訳に関連する言語理論は、選択としての意味の理論(a theory of meaning as choice)でなければならず、そのためにはそれは「機能的意味論」(a functional semantics)を備えていなければならない。機能的意味というのは、具体的には言語のメタ機能(観念構成的、対人的、テキスト形成的機能^{註4)})のことである。もし意味が文脈における機能だとすれば、意味の等価は文脈における機能の等価である、としている(Halliday, 1992, 2001年論文も同趣旨)。そして、2001年の短い論文(Halliday, 2001)では、よい翻訳とは、翻訳の行われる状況(context)において最も価値がおかれる言語的特徴をとらえた翻訳、あるいは起点言語テキストでの価値に即した翻訳である、としている。

このことを前提として、選択体系機能言語学に依拠して起点テキストと目標テキストとを比較対照し、メタ機能レベルでの等価を探るとというのが、ハリデーの1992年論文の翻訳論の趣旨である。1992年論文で特に目を引く点を以下に記す。

言語間、そしてテキスト間の「意味的等価」を論じるにあたり、そのような等価は絶対的なものではない、ということが大切である。ファース(F. R. Firth)がよく言ったように、もし意味がコンテキストにおける機能であるならば、意味の等価はコンテキスト内の機能の等価なのである。翻訳者が翻訳の際に行っているのは、機能的等価が築かれているコンテキストとは一体何なのか、について常に行っている選択なのである。例えば、起点言語のXという項目(形態素、語、句その他)があり、目標言語に潜在的な訳語の可能性として、A, B, C, D, E, Fがあるとすると、まず翻訳者は目標言語にこれらの一連の訳語が選択肢としてあることに気づく。次に、これらは自由な選択肢ではなく、コンテキストによって制約を受ける。これは、例えばAを必ず選ばなければならない、BやCではいけない、というのではない。もしAとかBとかCのどれかを選んだならば、その選択の意味はコンテキストによって異なる、ということである。したがって、次に訳語の幅を意識し、コンテキストが制約する効果について意識することによって、自分が選択を行うコンテキストにおいて何が関連する重要なコンテキストなのかを決めなければならない。尤も、これは従わなければならない指針であるとか手続きであるわけではない。言語学者はこのようなプロセスの分析モデルを定立するのである。言語学は翻訳等価の理論を提供できるものではない。一般理論はありえないのだ。しかしながら、コンテキストの理論は提供できる、というのがハリデーの主張である。そしてこの後、具体的テキスト分析を行いながら、選択体系機能言語学によるコンテキスト理論を紹介している。

ハリデーの翻訳論を受けて、SFL学派の翻訳研究者はレジスター分析(後述)を中心として多くの翻訳理論を展開した。B. Hatim, I. Mason, M. Baker, J. House, J. Munday, J. Marcoなどである。「翻訳者が翻訳の際に行っているのは、機能的等価が築かれているコンテキストとは一体何なのか、について常に行っている選択なのである」という謂いは本稿が採る等価構築

の視点も含意されている。確かに社会的コンテキストがあり、それが言語の範列軸における選択を機制するという着想において、この選択は即ち言語使用者の主体的決定であり構築行為であると言える。しかしながら、SFL 学派は言語使用のダイナミズムを捉え損ねているきらいがある。つまり、テキストから回顧的にそれを機制する社会的コンテキストの同定および 3 つのメタ機能の分析を行うのであるが、ディスコース実践が刻々と変化する有り様、言及指示レベルだけでなく、相互行為のレベルでもメタ語用論的にテキスト化とコンテキスト化の反復により意味空間の更新、創造、発展が為されており、それによってマイクロレベルでもマクロレベルでも社会文化史的なコンテキストが刻々と変動しているというダイナミズムを説明しきれていない。SFL は自らを「社会記号論」と称しているにも拘わらず、記号論的な動的全体が把握できていない、つまり、言語コミュニケーションにおける構築行為の実相を捉えきれていないことが指摘されよう。

(11) M. ベーカー(1992 年、第 2 版 2011 年)

M. ベーカーは 1992 年の著書(Baker, 1992)で、5 つのユニットにおける等価を論じている。2011 年の第 2 版では、(1) 語レベルでの等価、(2) 語を超えたレベルでの等価、(3) 文法的等価、(4) テキスト的等価:主題・情報構造、(5) テキスト的等価:結束構造、(6) 語用論的等価、(7) 等価を超えて:倫理と道徳性、の 7 つを扱っているが、(4) と(5) はテキスト的等価で一括され、(7) は等価とは別の論点を第 2 版で付け加えているため、基本的にベーカーは等価を 5 つのレベルで捉えている。ベーカー自身、等価は様々な言語的・文化的要因に影響され、常に相対的であるという条件を付している(Baker, 1992, p. 6)。また、等価概念は翻訳者が慣れ親しんだ便宜上の概念だともしている(Baker, 1992, pp. 5-6)。

「等価」を論じるに当たり、語彙意味論の多面性を等価の多面性として捉えたり、語彙的等価とテキスト的等価を同次元で分類したりするなどの誤謬が例えばカラーには見られるが、ベーカーは「翻訳教育」を目的に、翻訳の分析ユニットで等価を論じる志向性で体系を示したところが評価されよう。ベーカーには、(1) 語→(2) 語を超えた句→(3) 句を超えたセンテンスの統語→(4)(5) センテンスを超えたテキスト、そして(6) 語用論、というボトムアップ式に等価を検討し、翻訳教育目的を達成しようという工夫が見られる。

思うに、従来、直訳 vs. 意訳(ないし、起点言語志向 vs. 目標言語志向)という二項対立図式は盛んに議論されてきたものの、それが一体テキスト全体のどこで発現しているのかについての緻密な議論を経ず、主観的に分析単位を設定して議論されがちであったことが、ベーカーによる翻訳ユニットごとの分析方法によって、語レベルでは起点言語志向であるが、統語レベルでは目標言語志向である、などのようなより緻密な議論への展開が可能となる。同書は「等価」論を扱った翻訳理論として最も議論の対象になるものであるため、他よりも厚く詳細に検討してゆくこととする。

(1) 語レベルでの等価の章では、まず語と形態素の区別をするが、分析の中心は語の意味であるとする。そして語の意味を 4 つに分類する。命題的意味(言及指示的意味のこと)、感情的意味(感情を伴った内包的意味のこと)、前提的意味(他の語との共起制限のこと)、連

想的意味(方言やレジスターに起因する意味のこと)の4つである。連想的意味の方言には、地理的なもの、時間的なもの、社会的なものがあり、レジスターにはフィールド、テナー、モード註⁵という3つのパラメーターがあるとする。次に、語のレベルで等価が実現できない場合、つまり非等価の問題を扱う。この非等価の理由として言語による経験の分節の違いを挙げ、言語による意味場と語彙項目の違いを説明する。そして、語レベルでの非等価に対応するストラテジーを詳述する。非等価の諸言語ペアに共通した問題として、(a) 文化特有の概念である場合、(b) 起点言語の概念が目標言語で語彙化されていない場合、(c) 起点言語の語が意味論的に複雑である場合、(d) 起点言語と目標言語が意味の分節を異にしている場合、(e) 目標言語に上位語がない場合、(f) 目標言語が特定の用語(下位語)を欠いている場合、(g) 身体的・対人的な視点に違いがある場合、(h) 感情的意味に違いがある場合、(i) 形態に違いがある場合、(j) 特定の語形を使用する頻度や目的に違いがある場合、(k) 起点テキストの借用語を使用する場合、を挙げている。次に、プロの翻訳者が使用するストラテジーとして、(a) より一般的な語(上位語)による訳出、(b) 中立的または感情的意味が薄い語による訳出、(c) 文化的置換による訳出、(d) 借用語の使用または借用語に説明を加えた訳出、(e) 関連語を使用した言い換えによる訳出、(f) 関連しない語を使用した言い換えによる訳出、(g) 削除による訳出、(h) 説明図による訳出、を挙げている。

(2) 語を超えたレベルでの等価の章では、コロケーションとイディオム・固定表現の2つを大きく扱う。コロケーションについては、その幅と有標性、コロケーションとレジスター、コロケーションの意味、翻訳におけるコロケーションをめぐる落とし穴と諸問題の4つを説明している。そして、落とし穴と諸問題として、起点テキストのパタンの踏襲、起点言語のコロケーションの意味の誤解、正確さと自然さとの緊張関係、文化特有のコロケーション、起点テキストの有標なコロケーション、を挙げている。次に、イディオム・固定表現については、翻訳の方向性、イディオムの解釈、イディオム翻訳の困難さ、イディオム翻訳のストラテジー、を論じる。イディオムの解釈として、(a) イディオム表現の両義性(文字通りの意味とイディオムとしての意味)、(b) イディオム表現の起点=目標両言語における表層的な意味の類似と深層的な意味の相違について説明している。また、イディオム翻訳の困難さとしては、(a) イディオム・固定表現は目標言語に等価表現がない場合、(b) 目標言語に類似表現があっても、意味内容や内包的意味が異なる場合、(c) 起点言語でのイディオムの使用に、字義の意味とイディオムの意味を両義的に使っている場合、(d) イディオムを使用する慣習、コンテキスト、頻度、が起点=目標言語間で異なる場合、を挙げ、イディオム翻訳のストラテジーとしては、(a) 類似した意味と形式のイディオムを使用する、(b) 類似した意味だが類似しない形式のイディオムを使用する、(c) 起点言語のイディオムを借用する、(d) 言い換えによって訳出する、(e) イディオムの遊びの部分削除して訳出する、(f) イディオム全体を削除して訳出する、を挙げている。

(3) 文法的等価の章では、文法範疇と語彙範疇、諸言語における文法範疇の多様性、語順に関する概略、テキストについての導入、を説明している。文法範疇と語彙範疇では、形態素、統語、語の関係について簡単に説明し、文法範疇の選択は義務的で、語彙範疇の選択は選択的であることを説明している。諸言語における文法範疇の多様性では、数、性、人称、

時制と相、態に関する説明がなされている。そして語順に関する概略では、諸言語の構成要素の違いに関して、格変化にも触れながら若干の説明をしている。最後に次項(4)の導入として、テキストと非テキストを比較し、テキスト構成の特徴として主題構造、情報構造、結束構造、一貫性と推意、ジャンル・テキストタイプについて触れている。

(4) テキスト的等価: 主題・情報構造の章では、ハリデー学派の情報フローの概観とプラハ学派の情報フローに関する機能的文眺望(FSP)について扱う。まずハリデー学派の情報フローに関しては、主題構造としてテーマとレーマ(文法性と許容性、テキスト構成と展開、有標 vs. 無標の順番—左方テーマ、分裂文、疑似分裂文、テーマに関するハリデー学派の評価)、情報構造として旧情報と新情報(ディスコース中の新旧の判断方法、旧情報の決まり方、有標 vs. 無標の情報構造、有標の情報構造と有標のレーマ)が取り上げられている。次に、プラハ学派の情報フローに関する立場として、CD(communicative dynamism)を紹介し、項目としては文眺望理論における線条構造とテーマの位置づけ、線条構造と有標の構造、構成要素順とコミュニケーション機能との緊張関係—翻訳における問題、線条構造における順序配列の誤りを最小化する戦略の提案、を説明している。そして、戦略の提案として、態の変換、動詞の変換、名詞化、外置移動を挙げている。

(5) テキスト的等価: 結束構造の章では、指示(反復、下位語、上位語、一般語、代名詞)、代用・省略、接続(付加的・反意的・因果的・時間的・継続的接続)、語彙的結束性(再叙・コロケーション)を扱っている。

(6) 語用論的等価の章では、一貫性、一貫性と解釈プロセス: 推意、一貫性・推意と翻訳戦略、を扱う。まず一貫性と結束構造の違いと、テキスト・コンテキストとの関係を説明し、次いで推意について説明している。推意の説明では、P. グライスの会話の協調原則を紹介し、会話的含意や標準的含意について述べている。一貫性・推意と翻訳戦略では、語と構造の慣習的な意味と指示的意味の同定、協調原理とその格率、言語的・非言語的発話のコンテキスト、その他の背景知識の項目、以上の項目に関係する項目の利用可能性、について説明している。

*

以上が M. ベーカーの 1992 年 *In Other Words* 及び 2011 年第 2 版の内容である(第 2 版で追加された「等価を超えて: 倫理と道徳性」の章は、等価構築の観点からは等価論に大いに関係するが、本稿では批評を省略する)。ここでは少し立ち入って、ベーカーの等価理論を批評することによって、本稿で取り上げた他の等価論諸学説をも包摂して検討する。

以上で見てきたベーカーの体系は、(翻訳教育の)操作上、「等価」を 5 つの単位に分類したものである。①語のレベル、②語を超えたレベル、③文法のレベル、④テキスト構成のレベル、⑤語用論のレベル、の 5 つであるが(ポポヴィッチ、コラー、ウイドーソンも同様の志向性を有する)、この体系のもっとも弱い点は、①～④が言語構造、つまりコードの次元、⑤が語用論、つまり言語実践行為の次元であるところ、ベーカーは⑤を一貫性(coherence)と推意(implicature)という認知的側面の議論に矮小化してしまった点にある。これは等価構築の「行為性」に照らすと誤謬を含んでいると言わざるをえない。①～④は二言語間の等価構築をす

る言語構造の地平で、⑤は翻訳行為のもつ社会行為の地平で論ずるのが適切であり、峻別したほうがわかり易い。

一つ一つ仔細に検討すると、①語のレベルでは、まず語の意味構造について品詞別に緻密な議論をすることなく、語彙意味論の分類を旧来のものに依拠していることもさることながら、本書が入門的翻訳教育書であることから仕方ない面もあるが、ハリデー学派のレジスター概念を導入するのであれば、同学派の全体系内でフィールド、テナー、モードが3つの言語のメタ機能(観念構成的機能・対人的機能・テキスト形成的機能)や語彙・文法層などどのように関連するのかについてしっかりした記述を行ってほしいところである。また、語の意味構造の最新の言語理論(例えば認知言語学による多義構造論など)を等閑視し、翻訳に際して直面する語の訳語決定の困難さを翻訳ストラテジーの分類から経験的に析出・抽象して演繹的に語の意味について扱っているところが、教育目的に資するためとはいえ、十分さを欠く印象がある(この点、ナイダも語の意味分析を等価の議論の前提として行っているが、扱っている言語理論が古く、考察が不十分である)。

次に、②語を超えたレベルでは、これも入門書であることからすると仕方ないのかもしれないが、近時、コーパス言語学の展開により発展を見せている *phraseology* (慣用連語)の緻密な議論が十分展開されていない。そして、ここでも訳語決定の困難さを翻訳ストラテジーの分類から経験的に析出・抽象して演繹的に語を超えるレベルでの意味の分類に収斂させてしまっていること、そしてそれが二言語間の質ではなく量的な関係へと帰着させている点が問題だと言えよう。また、フレーズないしイディオムの比喻性やその意味構造などについて論ずべきところ、単にイディオム性としてイディオムには字義的意味とイディオムとしての意味の両義性があるとだけしているという問題点も挙げられる。

③文法のレベルでは、扱っている文法範疇が一部の西洋言語に特有の範疇に限定されており、通言語的な対照言語学ないし言語類型論で扱われている項目を網羅的に分析しているわけではない。したがって、この程度の記述・説明では訳出ストラテジーとしても極めて限定的な説明でしかないと言わざるを得ない。そもそも、言語学が展開している文法には、英語で言えば、学校文法／伝統文法、構造言語学、生成文法、認知文法、機能文法、選択体系機能文法、(役割・指示文法も含んだ)言語人類学的普遍文法など様々あるが、これらのうちのどの文法理論が翻訳分析ないし翻訳教育に資するのかの検証がまず必要となる(この点、ナイダは生成文法を基底にした翻訳の三段階プロセスを提唱しているが、意味論不在のプロセス論は、パロールを扱う翻訳研究において、論外である)。

④テキスト構成のレベルでは、ハリデー学派とプラハ学派の理論に依拠した説明を行っている。もともとベーカーがハリデー学派を翻訳研究に応用した研究者であるので、選択体系機能言語学の知見からの分析が多くなることは必至であるが、やはりテキスト言語学の諸理論の全体を見渡したうえで、ハリデー学派が唱える論点を翻訳研究に応用する正当な理由を示し、そのうえでテキスト構成に関する議論を展開してほしいところである。また、テキスト構成と密接な関連がある分野は文体論であるが、全く論及が見られないため、これにも言及がほしいところである(ノイバートやカーデのようなテキスト論を基底にした機能的等価・コミュニケーション的

等価を論じている学説もあるが、テキスト性という言語構造論と語用論的効果という認知効果を混同した議論の展開が散見される)。

最後に、⑤語用論のレベルでベーカーは、一貫性 (coherence) と推意 (implicature) という認知的側面の議論に矮小化してしまった点が問題であることは前述のとおりである。そもそも「語用論」とはいかなる学問分野であるのか、それを翻訳研究に応用するとは一体何なのか、という原理的な議論を等閑視し、語用論の分野で盛んに議論が展開されている論点のみ取り出して説明をするという誤謬は根本的に見直さなければならない(本稿はこの点、詳述は避けるが、意味づけ論と社会記号論系言語人類学を基底に「語用実践」の社会文化的コンテクスト創出性を語用一般の効果とする)。この点、ナイダの動的等価の概念やニューマークのコミュニケーション重視の翻訳の概念も提唱されているが、これは翻訳の有する認知的効果のごく一部を照射した議論である。以上がベーカーの等価理論への大まかな批判点であり、それに連動して他の翻訳諸学説にも当てはまる批判点でもある。

(12) その他の等価論の展開

以上、代表的な等価論について見てきたが、少し取りこぼした視点を補足する。この等価の議論はかつて、ドイツで盛んに起こった。この点につき、平子が簡潔にまとめているので(平子, 1999, pp. 187-200)、それを頼りに若干触れておきたい。まずその祖形と考えられるのは E. コシュミーダである (Koschmieder, 1965)。翻訳は置き換えではなく、「言語実用論の領域で考えるものである。言語はそれが意図するものにおいて測られるべきものにすぎない、したがって二つの言語の間で、意図という共通項において、1対1の交換が可能である。コシュミーダは、意図というものは言語にかかわらず存立し得る超言語的なものなので目標言語においても表現できる、と言うのである」(平子, 1999, pp. 187-189)。図で示すと、以下のフローになる。

[Zeichen a: 言語 a の記号] → [Bezeichnetes a: 言語 a の記号内容] → [M(Gemeintes): 意図されたもの] → [Bezeichnetes b: 言語 b の記号内容] → [Zeichen b: 言語 b の記号]

次にライプツィヒ翻訳科学派は、伝達科学 (コミュニケーション科学) からの翻訳論を展開した。A. ノイバートの話し手 (Sprecher) どうしを結ぶという人間本位・現場本位の考え方は前述のとおりである (Neubert, 1981)。また前述した O. カーデは、翻訳とは「起点言語の合理的な情報内容を保持しつつ、伝達効果を損じないで目標言語で置き換えること」であるとし、情報内容を客観的に測定するために、コミュニケーション価値の潜在的等価の不変量を想定し、等価を量的なものとして捉えた (Kade, 1968)。H. ヴェルネは情報の等価という観点から、起点言語と目標言語の間の純内容の一致というテーマを論じ、「比較の第三点 (tertium comparationis)」を設定した (Vernay, 1981)。これも不変項を想定したものである。W. コラーは翻訳評価の観点から、二言語間のラングどうしの対応関係と、二テキスト間のパロールどうしの等価関係を峻別し、パロールのレベルでの 1対1 対応の関係を体系化しようとしたことは前述のとおりである (Koller, 1979)。

その後も等価は盛んに議論され続けている。前述のように、A. チェスタマンは「等価は間違いなく翻訳理論の中心的な概念である」と述べ(Chesterman, 1989, p. 99)、S. バスネットも自身の翻訳学の入門書で等価について、次のように記している。

翻訳における等価は従って、同一性(sameness)の探究として研究すべきではない。同一性は、同一のテキストを同じ目標言語に翻訳した2種類のテキストの間にも存在しないし、まして起点言語と目標言語での翻訳との間にも存在しない。ポポヴィッチの4つのタイプは議論のスタート点として有益であり、ノイバートの3つの記号論的カテゴリーは起点=目標テキストの内外の記号と構造との間の弁証法として等価を捉える方法へ向かうものである。(Bassnett, 2002, p. 36)

これは重要な指摘で、等価「A=B」(equivalent; equal value)は「A≡B」(identically equal)ではなく、「A≐B」(similar)なのであって、AとBが織りなす弁証法的な緊張関係である。バスネットの謂う「数学における正確な等価の定義が翻訳理論で使われる場合の深刻な障害となっている」(Bassnett, 2002, p. 33)とは、まさにこのことである。そして、この等価関係は、まずもってポポヴィッチのいう(1)言語的等価、つまり起点・目標両テキストという言語のレベルでの類似関係であり、これは(2)範列的等価、つまり選択軸でのパラダイム内の語彙範疇、文法範疇の選択に関わってくる。パースの言葉でいうと、同一パラダイム内の同一カテゴリー判断という類似性判断ということになる。またこれは(4)テキスト的等価、つまり連辞軸でも発現する関係で、類似性を連辞軸という指標性の軸に投影した、ヤコブソンの言う言語の詩的機能のレベルでの等価関係と言える。これらが、起点・目標両テキスト状況での類似した関係のなかで類似した機能を担うとするのがポポヴィッチのいう(3)文体的等価ということになる。

ここでバスネットのいうノイバートの3つの記号論カテゴリーとは、(1)統辞、(2)意味、(3)語用の3つの要素のことで、これはパースのカテゴリーに従っているとしている(Bassnett, 2002, p.34)。ポポヴィッチと対照させると、統辞がテキスト的等価、意味が範列的等価、語用がテキスト的等価、そしてその前提として言語的等価がある、という位置づけである。しかしながら、ここに言う機能的等価、テキスト的等価は言語的なものに閉じた概念では決してなく、バスネットのいう社会・文化・歴史的に開かれた「テキスト的關係網」(textual grid)の大きな枠での緊張関係に内蔵されたものであることを念頭においておかねばならない(Bassnett & Lefevere, 1998, p. 5; Lefevere, 1999, pp. 76-77; Bassnett, 2007, pp. 19-23)。

そして、バスネットはこの弁証法的緊張関係のなかに「不変の核」(invariant core)があると述べる。

もし10人の翻訳者が同じ詩の翻訳に取り組んだら、10通りの翻訳をするというのは、翻訳研究の確固たる事実である。しかしながらこの10通りの翻訳の中のどこかにポポヴィッチのいう詩の原文の「不変の核」はあるだろう。この不変の核はテキスト内の安定して変わ

らない基本的な意味的要素のことである。この要素の存在は意味圧縮の実験によって証明できる。変容ないしバリエーションというのは、意味の核は変えないが表現形式に影響を与える変化のことである。要言すると、不変の核とは一つの原文に対して存在するあらゆる翻訳の間で共通して存在するもの、と定義できよう。(Bassnett, 2002, p. 33)

この不変の核の正体と、これが一回一回の翻訳行為によってどのように変容を受けるか、そしてその変容に影響を与える諸変数は一体何か、を突き止める必要があるが、本稿は前述のとおり「等価は本質的に＜あるもの＞ではなく、＜構築されるもの＞」とする等価構築仮説から翻訳分析ないし翻訳諸学説のメタ分析を行う立場を採っている。そこでそもそも、この不変の核なるものを認めるか否か、仮に認めるとしてもどのような手続きでどのようなものを措定するか、そしてそれを操作上認める際に、どのような性質と限界があるかについても見極めが必要になってくる。要するに、翻訳不可能性を超克しつつ、翻訳不確定性の諸要因とは何かについての見極めが大切になる。

等価構築において強い相対性を認めるのであれば、不変の核なるものは存在しない。すべての翻訳結果は相対的である。他方、弱い相対性を認めるのであれば、ある種の核なるものを理論上措定し、その核からどの質・量で逸脱するかが相対性の要となることとなる。後者がいわゆる比較のための第三項を認める立場であるとも言えるが、どのような第三項を措定するか、今後さらに議論してゆかねばならない。これは単なる理論的遊戯ではなく、次節に掲げる翻訳諸学説をすべて認めたとして、最終的な翻訳テキスト分析の際の判断基準・評価基準を策定する作業は必要となる。

4. 等価論の展開

そこで「翻訳等価」の原理を根本的に再考するためには、これまでの翻訳諸学説をすべて＜等価構築＞の眼差しから、「等価論の展開」として社会等価論、等価誤謬論、等価超越論、多元等価論という枠組みで検討し直すことが必要になってくる。紙幅の制約上詳しくは別稿に譲ることとし、ここではその大枠だけ素描する。

まず、「言語等価論」の枠内で議論すべき論点は、「翻訳シフト」「翻訳ストラテジー」「翻訳の認知プロセス」である。語用論的・機能的等価を構築するために、コードレベルで二言語がどのように「シフト」しているのか、また効果的に等価を構築するための「ストラテジー(方略)」にはどのようなものがあるのか、そして等価構築のための「認知プロセス」はどうなっているのか、という諸論点である(テキストタイプ理論は本来、テキストを分析の基底に据えたこの言語等価論の範疇内にあると考えられる)。

次に、「語用実践行為」を重視すると、翻訳を「社会行為」として見る視点を持つことになる。その一つが、翻訳の社会行為性を加味して分析する「目的(スコポス)理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」などである。これは主に目標言語文化のなかで翻訳がどのような機能を有するかを論じる学説群である。

もう一つが、文化的・イデオロギー的転回を遂げたとされている翻訳学の諸学説群である。こ

これは翻訳行為の言語的側面から目を社会的・文化的・政治的コンテキストのほうへ向けた研究群で、「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の(不)可視性、倫理性と異化翻訳」「翻訳の権力ネットワーク」などがある。これは翻訳学における「文化理論」と位置づけられ、言語的な等価だけに議論の焦点を当てることを批判するいわば「等価誤謬論」と位置づけられる。

さらに、翻訳が前提とする意味の伝達という前提的イデオロギーを原理的に問い直す知的運動として考えられるのが翻訳哲学や翻訳思想が扱う問題系である。意味が等価裡に異言語間で転移するという発想は、西洋合理主義の中心をなすプラトンの絶対主義・ロゴス中心主義の哲学が土台になっているが、そこには原理的に超克できぬ「他者性」「異質性」「よけいなもの」が確かに存在する。そこで等価概念では到底解決のつかない「異なるもの」とどのように向き合い超克するか、つまり等価をどう超越するかという点に、翻訳者の使命がある、と考える地平が「等価超越論」である。

最後に、翻訳の研究手法の多様性(コーパス研究など)や翻訳分野・ジャンルの多様化に伴って、「翻訳等価」のあり方を複眼的・複層的に見ようとするのが「多元等価論」である。

5. 結論

以上のような翻訳研究の諸学説の〈全体像〉を見据えたうえで、本稿が紹介した翻訳等価に関する諸学説が、単に時代遅れの等価本質論であり、無意味なものであると周縁化するのではなく、〈等価構築〉という観点から、翻訳行為の社会文化史的コンテキスト(マクロ/マイクロコンテキスト)、翻訳者の言語/翻訳イデオロギー、翻訳テキストの等価構築性の三側面の有機的な相互連関を考えながら、「社会—翻訳者—言語」の関係性の原理的な解明を行う視点に立ったうえでの「翻訳等価論」を(再)検証しつつ、新たな論を(再)構築してゆく必要があると筆者は考える。

【著者紹介】

河原清志 (KAWAHARA Kiyoshi) 金城学院大学文学部准教授。専門は通訳翻訳学・認知言語学・メディア英語学・社会記号論。

【註】

- 1) カテゴリー化/等価行為は、コンテキスト負荷性(社会指標性)のみならず、そのコンテキストが帯有する恣意性・文化相対性・利害関心負荷性(象徴性)も有している。
- 2) 詩的機能は R. ヤコブソンが提唱したコミュニケーションにおける言語の六機能モデル(表出的機能、動能的機能、交話的機能、言及機能、詩的機能、メタ言語的機能)のうちの 1 つの機能のこと。〈メッセージ〉そのものへの志向、このことだけのためにメッセージに対して焦点をあわせることが〈詩的〉(poetic)機能である(ヤコブソン, 1973)。
- 3) 本稿では、「文体」とは「文やその諸要素のような言語に固有のマイクロ構造レベルに現れる—[中

略]構造 structure よりはむしろ織物 texture のレベルに現れる一言説の形式的な属性」であるとする(ジュネット, 2004[1991], pp. 113-114)。

- 4) 「観念構成的機能」「対人的機能」「テキスト形成的機能」は註 5 で示した各変数が一連の談話意味を形成し、これら 3 つのメタ機能となる。
- 5) 「フィールド」は何について書かれているか、「テナー」は誰が誰とコミュニケーションしているか、「モード」はコミュニケーションの形式、をそれぞれ表す。これら 3 つの変数がレジスター(言語使用域)を成す。

【参考文献】

- Baker, M. (1992/2011). *In other words*. London/New York: Routledge.
- Bassnett, S. (2002). *Translation studies*. London/New York: Routledge.
- Bassnett, S. (2007). Culture and translation. In P. Kuhlwezak & K. Littau (Eds.). *A companion to translation studies*. pp. 13-23. Clevedon: Multilingual Matters.
- Bassnett, S. & Lefevere, A. (1990). *Translation, history and culture*. New York: Pinter.
- Bassnett, S. & Lefevere, A. (Eds.). (1998). *Constructing cultures: Essays on literary translation*. Clevedon: Multilingual Matters.
- de Beaugrande, R. (1980). *Text, discourse, and process: Toward a multidisciplinary science of text*. New Jersey: Prentice Hall Press.
- Chesterman, A. (Ed.). (1989). *Readings in translation theory*. Helsinki: Finn Lectura.
- Chesterman, A. (2002). On the interdisciplinarity of translation studies. *Logos and language* 3 (1). pp. 1-9.
- Crisafulli, E. (2002). The quest for an eclectic methodology of translation description. In T. Hermans. (Ed.). *Cross-cultural transgressions: Research models in translation studies II: Historical and ideological models*. pp. 26-43. Manchester: St Jerome.
- Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, languages and identity*. Cork: Cork University Press.
- 深田智・仲本康一郎 (2008). 『概念化と意味の世界』研究社.
- ジュネット, G. (2004). 『フィクションとディクシオン—ジャンル・物語論・文体』水声社. [原著: Genette, G. (1991). *Fiction et diction*. Paris: Seuil].
- Halliday, M.A.K. (1992). Language theory and translation practice. Udine: Campanotto Editore. *Rivista internazionale di tecnica della traduzione*. Numero 0. pp. 15-25.
- Halliday, M.A.K. (2001). Towards a theory of good translation. E. Steiner and C. Yallop (Eds.). *Exploring translation and multilingual text production: Beyond content*. pp.13-18. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 平子義雄 (1999). 『翻訳の原理』大修館書店.
- House, J. (1977). *A model for translation quality assessment*. Tübingen: TBL Verlag Gunter Narr.
- House, J. (1997). *Translation quality assessment: A model revisited*. Tübingen: TBL Verlag

Gunter Narr.

- ヤコブソン, R. (1973). 『一般言語学』(川本茂雄・監修・田村すす子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子・訳). みすず書房. [原著: Jakobson, R. (1963). *Essais de linguistique générale*. Paris: Editions de Minuit].
- Kade, O. (1968). *Zufall und Gesetzmäßigkeit in der Übersetzung*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- 河原清志 (2011). 「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会 (編) 『翻訳研究への招待』第5号. 53-80頁.
- 河原清志 (2013). 「等価」鳥飼玖美子 (編著) 『よくわかる翻訳通訳学』(118-119頁) みすず書房.
- Kenny, D. (2009). Equivalence. In M. Baker & G. Saldanha (Eds.). *Routledge encyclopedia of translation studies*. pp. 96-99. London/New York: Routledge.
- Koller, W. (1979/1989). Equivalence in translation theory. translated from the German by Chesterman, A. In A. Chesterman, (Ed.). (2004). pp. 99-104. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koschmieder, E. (1965). Das Problem der Übersetzung. In W. Wilss (Hrsg.). (1981). *Übersetzungswissenschaft. <Wege der Forschung> Bd. 535*. Darmstadt.
- Lefevere, A. (1999). Composing the other. In S. Bassnett & H. Trivedi (Eds.). *Post-colonial translation: Theory and practice*. pp. 75-94. London/New York: Routledge.
- 松本曜 (2003). 『認知意味論』大修館書店.
- Munday, J. (2008/2012). *Introduction to translation studies*. London/New York: Routledge.
- Neubert, A. (1968). Pragmatische Aspekte der Übersetzung. In W. Wilss (Hrsg.). (1981). *Übersetzungswissenschaft. <Wege der Forschung> Bd. 535*. Darmstadt.
- Neubert, A. (1994). Competence in translation: A complex skill, how to study and how to teach it. In M. Snell-Hornby, F. Pöchhacker & K. Kaindl (Eds.). *Translation studies. An interdisciplinary*. pp. 411-420. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Neubert, A. & G. Shreve. (1992). *Translation as text*. Kent/London: The Kent State University Press.
- Newman, A. (1980). *Mapping translation equivalence*. Leuven: Acco.
- Newman, A. (1994). Translation equivalence: Nature. In R. E. Asher & J. M. Y. Simpson (Eds.). *The encyclopedia of language and linguistics*. pp. 4690-700. Oxford/New York: Pergamon Press.
- Newmark, P. (1981). *Approaches to translation*. Oxford: Pergamon Press.
- Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. New Jousey: Prentice Hall.
- Newmark, P. (2009). The linguistic and communicative stages in translation theory. In J. Munday (Ed.). *The Routledge companion to translation studies*. pp. 20-35. London/New York: Routledge.

- Nida, E. (1964). *Toward a science of translation*. Leiden: Brill.
- Nida, E. A. & Taber, C. R. (1969). *The theory and practice of translation*. Leiden: E. J. Brill.
- Palumbo, G. (2009). *Key terms in translation studies*. London/New York: Continuum.
- Popovič, A. (1976). *Dictionary for the analysis of literary translation*. Edmonton: University of Alberta.
- Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. London/New York: Routledge.
- Pym, A., Shlesinger, M. & Jettmarová, Z. (Eds.). (2006). *Sociocultural aspects of translating and interpreting*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Snell-Hornby, M. (1988). *Translation studies: An integrated approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Snell-Hornby, M. (2006). *The turns of translations studies: New paradigms or shifting viewpoints?*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Tymoczko, M. (2002). Connecting the two infinite orders: Research methods in translation studies. In T. Hermans (Ed.). *Crosscultural transgressions: Research models in translation studies II, Historical and ideological issues*. pp. 9-25. Manchester: St Jerome.
- Vernay, H. (1981). Elemente einer Übersetzungswissenschaft. Heidelberg 1974. In W. Wilss (Hrsg.). *Übersetzungswissenschaft. <Wege der Forschung> Bd. 535*. Darmstadt.
- de Waard, J. & Nida, E. (1986). *From one language to another: Functional equivalence in Bible translating*. Nashville: Thomas Nelson Publishers.
- Widdowson, H. G. (1979). The deep structure of discourse and the use of translation. In *The communicative approach to language teaching*. C.J. Brumfit & K. Johnson (Eds.). Oxford: Oxford University Press.